

二〇三三年三月三十一日

灯台を越えて海へと花吹雪
師の墓に額づきをれば花吹雪
水面切る鯉の背鱗に花の屑

智恵子
こすもす
素 秀

二〇三三年三月三〇日

中腹に抜きん出てをる大桜
春愁や思惟の菩薩のくすり指
花吹雪拍手喝采大道芸
瘤だらけなる老幹も花万朶
曲りたる腰を伸ばすや花の下
河原から土堤見あげれば花の雲

明日香
澄 子
もとこ
はく子
満 天
せいじ

二〇三三年三月二十九日

花人を縫ひて始まる鬼ごっこ
花堤 左右に 木津川 桂川
花葎やダビデの星と呼ばれたる

なつき
はく子
あひる

二〇三三年三月二十八日

青春切符老いの春愁払ふべく
花に酔ひ人にも酔ひて吉野山
花の下憩ふブランドゴルフ族

うつぎ
かかし
はく子

二〇三三年三月二十七日

旅の荷に聖書をしまふ入学子
胸 高 な 袴 姿 や 卒 業 子
蒲公英の道を辿りて教会へ

む べ
澄 子
あひる

二〇三三年三月二十六日

春愁を風に流さむ常香炉
卒業子部室に別れ惜しみけり
山門を出で深々と遍路笠

豊 実
みきお
素 秀

二〇三三年三月二十五日

急礫にひと息つぎし百千鳥
ままごとの飯に招かれ春の庭
小魚の群れるる春の水際かな
お彼岸や歩みの遅き夫支へ

澄 子
ひのと
豊 実
ぼんこ

毎日句会みのる選・二〇三三年四月二日